″共感″と″交感″の″帯″の創造を求めて

――日韓青少年社会意識比較調査をてがかりに――

馬居政幸

一　過去の歴史の重み

今年の八月一三日から四日間、私はソウルに滞在した。韓国の若者や子どもたちの間に浸透している日本の現代文化（マンガ、アニメ、CD、ファッション等）の現状と、そのことに対する研究者や教育関係者の評価についての聞き取り調査が目的であった。加えて、戦後五〇周年の八月一五日を、日本を最も厳しく見つめてきた韓国の人たちの目を通して考えてみたい、との思いもあった。

そのため、ソウル大教授で日本文化開放に関する諮問委員会の責任者である金文煥（キムムンファン）先生にインタビューを申し込んだ。独立記念日（光復節）の記念式典の準備で多忙のため一四日の朝食時であれば、ということでお会いした。金先生は文化政策に関する研究の第一人者、日本語に堪能で、日本に関する著書もあり、これからの韓国を担う研究者として最も期待されている方である。金先生は、朝食を挟んで約一時間、韓国の人達の日本文化に対する複雑な感情と韓国政府の文化政策について非常に丁寧に説明してくれた。その過程で、私は金先生に次のように質問された。

「国立中央博物館の前で記念撮影をしている日本の旅行者がおおいのですが、どのように考えているのでしょうか」

国立中央博物館とは日本の旧総督府。韓国の人達にとって、日本に支配された三六年間の苦難の歴史を象徴する建物である。ただし、金先生の口調は、日本人を非難するものではない。ただ、韓国人として、この建物の前で笑って記念撮影する旅行者をみれば、過去の歴史に対する日本人の認識を問わざるをえないことを理解してほしい、という

意味と推察した。だが、その問いが抑制されたものであればあるほど、背後にある歴史の重みと金先生の思いの深さが伝わり、私は答えとしてかえす言葉を見出せなかった。

二　ファッションとしての日本のタバコ

その国立中央博物館を取り壊すことを決定した金永三大統領の出席のもと、翌日の一五日に、博物館がある景福宮の前の大通りに五万人の人々が集まり、独立五〇周年記念を祝う式典が開催された。私は、体調を崩していたために、炎天下で行われる儀式には参加せずに、ホテルの窓から五万人の人達の万歳（マンセー）という声を聞きながら、前日の金先生の言葉を思い返しつつ、韓国の人達の日本に対する厳しい認識を改めて実感していた。

しかし、その日の午後、もう一つの韓国と出会った。ソウル外語大大学院の金景鎬（キムキョンホ）君と李南錦（イナムクム）さんと明洞でお会いした際のことである。お二人には、本年の七月から八月にかけて、韓国の主要新聞に掲載された日本文化に関する記事の収集をお願いしていた。

二人が収集してくれたファイルは、七月一日から八月一三日までの約一月半に、朝鮮日報だけで一〇二枚、一記事一枚で整理を依頼したが、その多さに驚いた。その中に、日本のタバコを集めて焼いている写真があった。禁煙運動と日本文化侵略批判がセットになった運動に思え、「やはり、韓国の人達は日本のタバコをすわないのでしょうね」と私が問いかけた。その時に返ってきた言葉に驚いた。

「そうでもないのです。日本のマイルドセブンを手に持っていることが、若者のファッションの一つなのです」

日本のタバコを集めて焼いている光景が新聞に掲載されるということは、それだけ韓国の人達の日本に対する評価が厳しいことを意味する。だが、そのように集められるということは、逆に日本のタバコが韓国に普及し、そのことが文化侵略という批判の理由の一つになる可能性がある、ということまでは、これまでの調査で理解できていた。しかし、日本のタバコを持つことが若者のファッションの一つである、ということまでは想像できなかった。

「若者には反日意識はないのですか」と再び問いかけたところ、少し考えたあとに次のように答えてくれた。

「若者はあまり深く考えないので……世代差が大きいことは事実です。でも、日本の過去についての認識は私たちも厳しくもっています。」

二人とも大学院博士課程で日本近代文学を専攻する秀才である。その意味で、日本への評価は他の若者よりは高いはず。だが、日本の歴史に対する評価を述べる際の口調は

厳しい。さらに、この返事を聞きながら、私は昨年、同様にインタビューする過程で出会った若者の言葉を思い出した。日本に留学経験のある二五歳の青年が、私が日本人であることを気遣いつつ、語ってくれた言葉である。

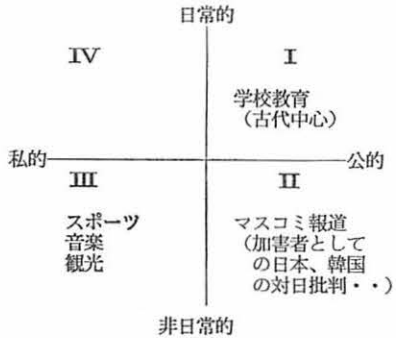
「日本に留学しているときは、日本のマンガをそれほど悪いものとは思いませんでした。でも、韓国に帰ってきて韓国語に訳されたものを見ると、やはり韓国に入れるべきではないと思うようになりました。その理由は……、韓国人としての感情……としか説明できません。」

お互いの国に関する情報

『韓国⇨日本』

※○印は反日意識に関する情報

『日本⇨韓国』



三　相互認識の情報の差異

金文煥先生は現在五十代、解放以後の苦難の歴史を自己の成長と重ね合わせてこられた世代。その意味で、日本の過去と現在に厳しい評価をされることは当然である。

他方、マイルドセブンをファッションとして受入れ、日本近代文学を専攻する若者がいる。だがその若者もまた日本に対する評価は厳しい。たとえ、日本の文化に親しみを感じても、〝韓国人としての感情〟はそれを許さない。

このような韓国の人たちの意識の背景に何があるのか。もちろん、過去の歴史があることはいうまでもないこと。しかし、個々人の意識が社会全体の意識になるためには、それをささえる仕組みが必要である。

上の二つの図をみていただきたい。これは、私が韓国の共同研究者と共に実施してきた調査を基に、日本と韓国における互いの国に関する情報を、「公的―私的」、「日常的―非日常的」という二つの軸で分類したものである。

まず、両国の情報量に注目していただきたい。『日本→韓国』に比較して『韓国→日本』の情報が圧倒的に多いことが理解できよう。さらにより大きいのは情報の質の差である。『韓国→日本』の図が示すようにI～IVのすべての領域において、韓国における日本の情報には○印のついた項目が多い。いずれも、韓国の人達に〝反日意識〟を喚起する情報である。それは、韓国の子どもや若者の間に、日本の加害性という〝歴史的事実の重み〟を基盤に、小学校から中学・高校へと成長するに従って、次の①～⑥のような社会過程が総合されることにより、戦後（解放後）五〇年を経てもなお〝反日意識〟がより強く育成され続けていることを示唆している。

①日常的に学校教育を通じて教えられる公的な事実（I）
②日常的にテレビ・新聞等の情報環境による公的な事実とその再確認（I）
③日常の身近な人間関係や生活習慣に深く刻まれた私的な事実（IV）
④慶祝日や名所・旧跡の碑文などによる、非日常的で聖的な価値に基づく公的な正当化（II）
⑤家族や一族の忌日（命日）などで繰り返し確認される非日常的で聖的な価値に基づく私的な正当化（III）
⑥このような韓国の現状を無視する（理解できない）とか韓国の人達にとらえられない日本の側（特に政府・政治家）の対応と、その事実を増幅する報道（I）

四　共感の帯を求めて

日本に最も近く国境（ボーダー）を隔てる国が韓国。ソウル市では日本の衛星放送を直接受信することができる。近年、日常的に両国を行き交う人の数も増加している。だが、それでもなお、文字通り「近くて遠い国」と評されるように、両国の間にある壁は厚い。それを象徴する事実が両国の情報の量的質的な差異であると考える。

このように、韓国では今なお過去の歴史に起因する反日意識が根強い。そのため公式には日本の現代文化は輸入禁止である。だが他方で、『韓国→日本』の図のIIIとIVが示すように、〝遊びの世界〟（III）に、あるいは日常生活用品や耐久消費財などの〝日常生活に使用するモノ〟（IV）の中に、〝日本の現代文化〟が実質的に浸透していることも否定できない事実である。

実際には、スラムダンクに代表される日本のマンガのハ

ングル訳を、日本とほぼリアルタイムで小・中・高校生が好んで読んでいる。若者が集まる場所には、日本のゲーム器を詰め込んだゲームセンターが必ずある。そしてそのことを日本の新たな文化侵略ととらえ、さらにその内容が青少年に有害であるとの批判が教育関係者から繰り返し提起されている。

もっとも、韓国内には、日本文化の良質な部分は許可すべきであるとの意見もある。特に、昨年、国際化時代を迎え日本文化を容認してもよいのではないか、との韓国駐日大使の発言を契機に、テレビの特集番組等により日本文化開放についての賛否両論が提示されている。韓国政府においても、教育部（文部省）を中心に開放の是非が論議されている。その諮問委員の代表が金文煥先生である。

ただし、他方で、先に紹介したように、日本の文学やマンガが読まれ、CDが聞かれ、マイルドセブンがファッションとして吸われているということは、日本の現代文化への欲求が存在することもまた否定できない事実である。

そして、このような矛盾する感情と欲求の間にこそ、日本と韓国の新たな関係、とりわけ両国の若者が〝真のイコールパートナー〟として共に生きる世界〟を新たに創造するための契機があることを、インタビュー過程で知り合った韓国の友人に学んだ。それは、「なぜ日本でも韓国でも、これほどマンガが子どもや若者に受け入れられるのか」との質問に対して、世界のマンガ文化の現状を俯瞰しつつ答えてくれた韓国のマンガ雑誌『少年チャンプ』の編集部長の黄卿泰（ファンギョンテ）氏の次の言葉である。

「マンガには作者と読者の間に〝공감대（コンガムデ）（共感帯）〟があるからです。」

私はこの黄部長の〝共感帯〟という言葉を次のような意味として理解した。

「作者と読者が同一の存在になることからではなく、相互に異なる存在であることを認め合いつつ、しかし作品という共通の場において、両者が互いに相互の世界を共有しようとする時に、初めて生じるもの。」

この作者と読者の関係を、日本と韓国の若者の関係に置き換えればどうなるか。これが先に、〝真のイコールパートナーとして共に生きる世界〟を創造する契機と述べた理由である。そして、私はこの概念を手がかりに、日韓両国の青少年の間に、次のような意図せざる過程が進行していると考えるようになった。

すなわち、①マンガの人気の秘密は、作者と読者の間にある〝共感帯〟であるという黄部長の指摘が正しいなら、②日本と韓国の青少年が、マンガをはじめ同じ若者文化に、リアルタイムで接しているという事実は、③両国の青少年

の間に、日本のマンガをはじめとする若者文化を媒介にして、意図せざる過程において、〝共感帯〟の基盤が形成されつつあることを示唆しているのではないか。

このような私の仮説を指示するデータを提供してくれたのが、私も共同研究者として参加し実施された日韓青少年意識比較調査の結果である。（表はまとめて文末に掲載）

五　交感の帯の創造のために

表1をみていただきたい。韓国の若者は、日本の若者と比較して、日本への関心度は高いものの、敵対感もまた高い。先に紹介した反日意識を反映する結果である。

他方、日本の若者の場合は、韓国への関心は低く、親しみも感じていないが、敵対感もまた持っていない。

では互いの国への評価はどうか。表2をみると、日本の若者の韓国への評価は高い。特に、「過去の不幸を清算、将来に向かって積極的に協力」が五・三八、「過去に何度か侵略、多大な損害を与え、謝罪すべき国」が五・一四、「国民にバイタリティ、将来発展」が三・一二、「勤勉、すぐれた」が二・八九、「将来、協力しあう国」が二・三六、と、両国の相互理解を進める上で基礎となる質問への評価は非常に肯定的である。

韓国の若者の場合はどうか。「国民にバイタリティ、将来発展」は日本より高く四・〇〇、「勤勉、すぐれた資質」も二・六〇で、評価は高い。だが、「将来、おびやかす国」も三・〇〇と高く、「不可解な国」も、一・八〇で、日本との差は二・六四と大きい。現状の日本の力を評価するものの、過去の歴史に基づく不信感はいまなお続いていることを示唆する結果であり、先の相反する評価が併存する韓国の若者の意識を反映した結果と考える。

では、相互理解を進めるうえで何が重要か。表3の結果は今後の日本のあり方を考える上で示唆的である。

まず、日本が韓国より肯定度が高いのが次の二項目。

「相手国に住んでいる人と友達になる」

「相手国から来た人といっしょに仕事をする」

他方、韓国が日本より高い項目は次の四項目である。

「日本と韓国の関係をよくするために努力する」

「相手国に旅行にでかける」

「相手国の言葉を勉強する」

「相手国でしばらく生活する」

韓国の若者の積極性を示す結果である。

以上の調査結果は、消極的だが確実に基盤を築いている日本、積極的だが二面性がある韓国、と特色の違いはあるものの、両国の若者の間に、〝共感の帯〟が確実に創造さ

れつつあることを示唆していると考える。ただし、両国の若者がそのことを互いに認め合っているかどうかは、疑問といわざるをえない。特に、日本の若者の関心度は低い。より積極的な対応が要請される。

このことについて、私は、再び韓国の友人からヒントとなる言葉をえた。それは李元馥徳成女子大教授の〝교감대（キョガムデ）（交感帯）〟という言葉である。李元馥先生もまた、金文煥先生と同じ日本文化開放に関する諮問委員会の委員であり、韓国で最も有名なマンガ作家である。

李先生は、両国の若者が共有する現代文化により〝共感帯〟が相互に生まれつつあることを認めながらも、それだけでは友好関係は創造できないとして、「重要なのは〝共感帯を交感帯〟に転換していくことです」と語った。

〝交感帯〟とは相互の違いを認めるのみでなく、積極的に働きかけることを要求する概念である。

これまで、日韓両国は互いの現状を同じ目の高さで知り合う機会を見失いがちであった。その結果が、先に指摘した両国の相互認識に関する情報の差ではないか。だがその間に、意図せざる過程であっても、両国の青少年のあいだに〝共感の帯〟が生まれつつあることを認めたい。

確かに日本と韓国の間には、今なお様々な問題があり、その解決への責任の多くは日本の側にあることは否定できない。だが、それゆえにこそ、両国の青少年の間に生まれつつある、互いの異質性を〝認め合う共感の帯〟を、〝互いに、生かし合い、学び合い、教え合う〟ための〝交感の帯〟へと転換する契機をいかに積極的に見出し育むか。これが最も重要な課題と考える。

調査結果が示すように、韓国の若者の意識は既にその方向にある。問題は日本の若者である。だが、その責任は今と未来を生きる若者ではなく、過去の歴史を生きた大人の私たちにあると考える。その一人の大人としての私なりの小さな一歩として、本年九月三日から一週間、研究室の学生や静岡の教員一七名とともに韓国を訪問する。その結果を再び報告できる機会があることを願っている。

（うまい　まさゆき　静岡大学教育学部教授）

・筆者の日韓比較論については次の拙著を参照ください。

① 「日本と韓国における青少年文化と意識構造の比較研究（その一）」静岡学園短期大学研究報告5号

② 「日本の韓国における学校と教室文化の比較研究（その一）」静岡大学教育学部研究報告　人文科学篇44号

③ 「日韓社会科教育比較考（その一）」静岡大学教育学部研究報告　教科教育学篇26号

表1　相手国にどういう感じをもっているか

	日本	韓国	レンジ
よくも悪くも相手国に関心をもっている。	-2.11	1.87	3.98
相手国に親しみを感じる。	-2.29	-4.38	-2.09
相手国に敵対感を感じる。	-5.37	2.16	7.53

注　1)　数字は加重平均値。
　　2)　加重平均値は「まさしくそう思う」を10点、「どちらかといえばそう思う」を5点、「どちらともいえない」を0点、「どちらかといえばそうは思わない」を -5点、「まったくそうは思わない」を -10点として算出。
　　3)　レンジは韓国と日本の加重平均値の差。次表以下、同様。

表2　相手国への評価

	日本	韓国	レンジ
過去の不幸を清算し、将来に向かって積極的に協力すべき国である。	5.38	-	-
過去に何度か侵略し、多大な損害を与えたことを謝罪すべき国である。	5.14	-	-
国民にバイタリティがあり、将来発展する可能性を秘めた国である。	3.12	4.12	1.00
勤勉で多方面にわたってすぐれた資質をもっている国民である。	2.89	2.60	-0.29
わが国が、将来、発展する際に、協力しあう国として、最もふさわしい。	2.36	0.07	-2.29
儒教の倫理を大切にしている精神的に誇り高い国民である。	1.82	-	-
民族を二つに分けられたことで不幸を強いられた同情すべき国民である。	1.50	-	-
かつて文化的に恩恵をうけた尊敬すべき国である。	1.30	-	-
過去のことを根にもち、日本人に対して憎しみの念が強い国民である。	0.39	-	-
将来、わが国の存在をおびやかすことになる国である。	0.25	3.00	2.75
国民一般のものの考え方や価値観は、基本的にわが国と同じである。	-0.60	-3.45	-2.85
何を考えているかよくわからない不可解な国である。	-0.84	1.80	2.64
今後、次第に経済的に衰退し、国の力が弱まっていく国である。	-3.54	-2.26	1.28

表3　相互理解を進めるうえで何が重要か

	日本	韓国	レンジ
相手国に住んでいる人と友達になる。	2.00	1.35	-0.65
日本と韓国の関係をよくするために努力する。	1.99	2.70	0.71
相手国に旅行にでかける。	1.53	3.96	2.43
相手国から来た人といっしょに仕事をする。	0.79	-0.61	-1.40
相手国から来た人をホームステイさせる。	-0.64	-1.83	-1.19
相手国の言葉を勉強する	-1.77	3.27	5.04
相手国でしばらく生活する。	-3.09	0.49	3.58
相手国の大学や大学院に留学する。	-4.03	-1.34	2.69
相手国の会社に就職し、相手国で仕事をする。	-5.35	-4.36	0.99

・本調査は1993年11月に日韓両国の中・高・大学生、総計3000名を対象に実施。
・日本側代表者は筑波大教授門脇厚志。韓国側代表者はソウル大教授文龍鱗

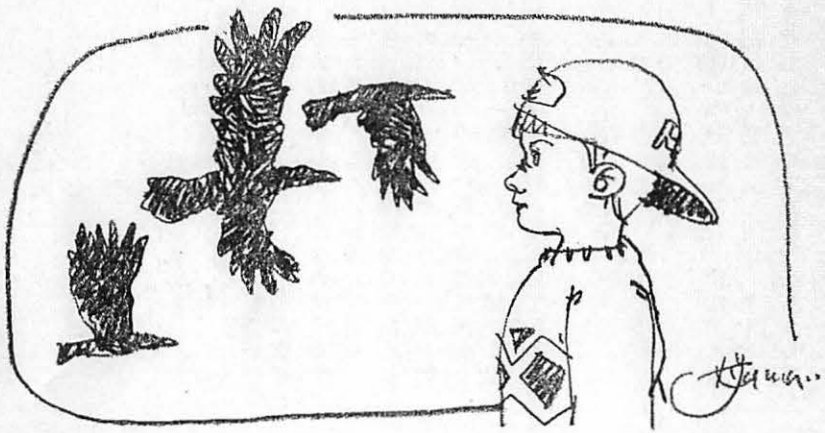
青少年問題　第42巻　第10号

巻頭言　きょうだいの大切さ……依田　明…2
〝共感〟と〝交感〟の〝帯〟の創造を求めて ……馬居　政幸…4
—日韓青少年社会意識比較調査をてがかりに—
若者の対人恐怖症……岡田　努…12
青年期の友人関係……角野　善司…18
未知らぬ人との偶然の出会いこそ
ひとり旅の最大の喜び ……山浦　正昭…24

晩婚化とその背景 ……中野　英子…28
調査報告　中国高校生の性意識・性行動 ……胡　霞…36
町ぐるみの青少年交流事業—鹿児島県大島郡伊仙町の取り組み—……川畑　実道…44
海外情報　友達の死の受け止め方 ……黒川　慧…50

本　親子が育つ家庭「共学び、共育ち」……文　部　省…54
各省だより 「平成7年度青少年健全育成中央フォーラム」の開催について……56
口絵によせて　豊富な雪を利用して ……国立妙高少年自然の家…35
青少年問題関係主要記事紹介 ……57

☆口絵　国立妙高少年自然の家
☆目次カット　山内和則



「どいて〜〜」止まれないの〜〜 ▶

▲スノーチューブに挑戦だ　さあいくぞ!!

▼見て私達のお城を　今夜はここに泊まるの

雪の上でもおいしいご飯が作れるよ

ぼくはこのスキーがいいな

平成7年9月25日印刷
平成7年10月1日発行（毎月1回1日）　昭和29年8月20日第三種郵便物認可
ISSN 0912-
第42巻10号

編集協力　総務庁青少年対策本部

青少年問題

"共感"と"交感"の"帯"の創造を求めて……馬居　政幸
若者の対人恐怖症……岡田　努
青年期の友人関係……角野　善司
未知らぬ人との偶然の出会いこそひとり旅の最大の喜び……山浦　正昭

財団法人 青少年問題研究会　平成7年（1995年）10月号

平成七年九月二十五日印刷
平成七年十月一日発行（毎月一回一日）
昭和二十九年八月二十日第三種郵便物認可
青少年問題　第四十二巻　第十号
定価三八〇円（本体三六九円）（送料六八円）

青少年問題研究会出版物のご案内

本誌『青少年問題』をはじめ，弊会刊行物を毎々ご購読賜わり，厚く御礼申しあげます。

現在継続刊行中の月刊誌，補導委員手帳と，『青少年指導者必携』についてのご案内は下記のとおりです。

◎月刊 青少年問題

A5判　定価380円（送料別）
1部の年間購読料は5,376円（送料込）

第20巻よりバックナンバーはほぼそろいます。

◎青少年指導者必携

1992年改訂第5版　A5判
本体1,800円（送料別）

青少年問題に関する基礎知識と現状，青少年指導上の留意点などをわかりやすくまとめた指導者必携の書。

◎少年補導委員手帳

前文改訂・最新版
定価 450円（送料別）

センター名・市町村章など箔押しご希望の際は実費加算となります。詳細は事務局にお尋ねください。

◎青少年問題用語小辞典

B6判　360ページ
本体1,900円（送料別）

多種多様な青少年問題関係用語1,080について，関係各省庁担当官のご指導，ご協力で平明かつ簡潔に解説したものです。
元総理府青少年対策本部次長 松浦泰次郎氏推薦，本会編。

◎都道府県 青少年保護育成条例集

A5判　1,140ページ
（平成4年版）定価 12,000円

本書は昭和36年に「青少年の保護育成に関する条例関係資料」として，総理府でとりまとめられたのが最初ですが，その後条例制定県の増加に伴って，関係方面から本書の利用申し込みが多くなり，一般発売が強く求められていたものです。

☆お申し込み・お問い合わせは本会事務局へ 電話・FAX（03—3262—6057）

雑誌　05585-10